

●公認心理師 小鹿和男さん

学校と子どもをつなぐ「翻訳者」

●学校の外から子どもたちを支える

キャンピングカーで青森県南や岩手県北を訪ね、ゲーム依存や不登校のつらさを抱える子ども、保護者、大人の心の悩みに寄り添う公認心理師・小鹿和男さん。

36年間、小学校教諭として子どもたちと向き合う中で、小鹿さんが強く感じたのは、「人との関わりが子どもを少しずつ成長させる」ということでした。特に約20年間携わった特別支援教育では、家庭や地域と力を合わせることで、大きく成長していく姿を数多く見てきました。

一方で、学校へ行けなくなった子どもたちには、その支援が届きません。だからこそ、小鹿さんは学校の外へ出ました。定年退職後に公認心理師の資格を取得し、自ら子どもたちのもとへ足を運ぶ活動を始めたのです。「学校へ戻すことが目的ではありません。けれど、学校は子どもたちが最初に社会と出会う場所。学校でしか学べないこともあると思います」と小鹿さん。

そのため、子どもが抱える声にならない

思いを学校へ伝えます。同時に、学校や先生方の思いを保護者へ伝えます。それぞれの立場を知るからこそできる「翻訳」が、小鹿さんの役割です。

「人は、人との関わりの中で傷つくことがあります。しかし、人との関わりの中でしか得られない喜びや成長もあります」。そう信じるからこそ、小鹿さんは今日も子どもたちのもとへ向かいます。

●自然の中で心がほぐれる瞬間

カウンセリングでは「個室で対話する」というイメージが強いですが、小鹿さんはキャンピングカーで子どもたちを迎えに行き、南部町の豊かな自然へ出かけます。ハイキングやさくらんぼ狩り、料理を楽しみながら過ごす時間は、子どもたちが少しずつ人との関わりを取り戻していく大切な機会です。

「焼き肉を配ってみる?」：地域のイベン



プロフィール

こしか・かずお

蓬田村出身、南部町 朧渡在住。
三八地域で小学校教員を務め、令和元年（2019）定年退職後、公認心理師の資格を取得。「こころの相談室 こしか」を立ち上げ、トレードマークのキャンピングカーを駆使して心の悩みに寄り添う。

トなどで小さな役割を任されることで、子どもたちは自然に周囲の人と関わり始めます。無理に言葉を引き出すのではなく、一人ひとりのペースを大切にしながら、少しずつ社会との接点を増やしていきます。

「自然はセラピストなんです」

風や木々、季節の移ろいに包まれ、人と自然の中で過ごす時間が、子どもたちの心をゆつくりとほぐします。



上——キャンピングカーと小鹿さん
下——穏やかな笑顔で話を聞く小鹿さん

● 作家 三浦恭子さん

表現で人の背中をそつと押す

● 悲しみの先に見つけた表現

三浦恭子さんは、小さい頃から絵を描くことが大好き。20歳で上京すると、日本画を習い、パソコンによる創作に出会いました。33歳で帰郷後はガラス工芸作家として活動し、カルチャー講座で指導をしたことも。

創作活動の転機となったのは平成23年（2011）の東日本大震災後、母を亡くしたことでした。三浦さんは母が最期を迎えるまでの数カ月間、仕事を辞めて付き添いました。母を亡くし、大きな喪失感を抱えながら少しずつ動き始めようとした時、ふと思いついたのがパソコンソフトを使った創作のことでした。

再び描き始めた作品は、やがて動画や絵本へと形を変えていきます。令和2年（2020）には電子書籍を出版し、翌年には初めて紙の絵本を刊行しました。

淋しさと悲しみを吸って大きくなるドラゴンや、意地悪でいたずら好きな女神。三浦さんの作品には、少し風変わりなキャラクターが登場します。「筋縄ではいかない物語の根底にあるのは、自身が落ち込んだ時に

感じた思いや、そこから少しずつ前を向いていった経験です。

「落ち込んだ時、自分はどうやって回復していったんだろう」

自分自身の回復の道のりを描いた物語は、今度は作品を手にとった誰かの心へと届いていきます。

● 絵で結ぶ人と人の出会い

現在は日本画制作に再び向き合い、創作仲間が集うグループ展を不定期開催。その名も「絵結び展」といいます。

「絵を描く人同士や、作品を創る人と見る人を絵が結びつけてくれたらいいな」と思っている。『この人とこの人を出会わせたら、どんなことが生まれるんだろう』って考えるのが好きなんです」と三浦さん。実際に、三浦さんの一言に背中を押され、創作活動やイベント出展に踏み出した人もいます。

「剣吉諏訪神社神楽」や豊作祈願の「え



プロフィール

みうら・やすこ

旧名川町出身、南部町剣吉在住。20歳で東京に出て33歳でUターン。絵本・イラスト制作のほかガラス工芸や絵画など、さまざまな創作活動をしている。絵本には『ポチョンのおしっこ』『いたずら神のおくりもの』『青いドラゴンになった女の子』などがある。



上——著作の絵本を手にする三浦さん
下——愛用のパソコンと『青いドラゴンになった女の子』のメイユイの絵

んぶり」などが受け継がれ、「南部手踊り」発祥地として知られる剣吉地区で育った三浦さんは、南部町の伝統芸能や文化にも強い関心を寄せます。

一枚の絵、一冊の絵本、一曲の舞。一瞬の出会いが誰かの心を動かし、新たな出会いや挑戦につながることもある。そんな表現の力を深く感じながら、三浦さんは今日も何かを創っています。

●理容師・織物作家 古田麗子さん

暮らしの知恵を、次の世代へ

●「毛」に導かれて
髪を整え、糸を紡ぐ

「気に入った布を使ってみよう」

古田麗子さんが洋裁を始めたのは、子育ての真っただ中。働きながら4人の子どもを育てる中で体調を崩し、自分のための時間を持つようになったのがきっかけでした。

布を探すうちに、織りムラも「個性」と捉える自由な手織り「さをり織り」と出会います。自分で布が織れると知ると、今度は糸に興味が湧きます。さらに糸を調べるうちに、糸は紡ぐと知ります。そして羊毛羊そのものへ。

「気づいたら、ここまで来ていました」

10年余り前に始まった手仕事は、自宅での羊飼育へとつながりました。「羊毛の毛刈り用の大きなバリカンを見た時、『使ってみよう！』って血が騒いじゃって」と古田さん。羊毛を刈り、洗い、糸に紡ぎ、織って、布へと変える。素材をたどるように歩んできた道のりを振り返り、古田さんは笑います。

理容師として31年。青い森鉄道三戸駅近くのヘアーサロンで両親と共に顧客を迎えな

がら、近年は訪問理容美容グループ「つばめ」のメンバーとしても活動。病気など外出が難しい人のもとを訪れ、理美容サービスを提供しています。

「結局、仕事も毛に関わる仕事。毛に導かれた人生なんだなと思いました」

●「手仕事がつながる暮らしの記憶」

現在は理容師業の一方、明治時代から続く清水屋旅館の一間を借りて機織りワークショップを開いています。参加者の中には、かつて機織りをしていた高齢者もいます。布を作る工程のうち、「織る」作業は最後の2割ほど。

「織る前の準備は難しくなりましたが、久しぶりに織れて嬉しい」

そんな声を聞いたたび、地域に息づく手仕事文化の豊かさを感じます。冬の農閑期に手を動かし、家族のために衣類を作っていた



プロフィール

ふるた・れいこ
旧南部町出身、南部町相内在住。東京で理容師として勤務後にUターン。理容師として働きながら、訪問理容美容グループ「つばめ」のメンバーとしても活動。機織り機を使った織物作家でもある。

記憶を語る女性たちとの出会いは、古田さん自身にとっても地域を再発見する時間です。

「だから新しいことを始めているつもりはなくて。昔からあった暮らしの知恵を見つめ直しているだけなんですよね」

ワークショップでは小学生が機織りに挑戦することもあったか。古田さんの手を通して、南部町の暮らしの記憶は次の世代へと受け継がれています。



上——実家のヘアーサロンで働く古田さん
下——機織りをする古田さん（清水屋旅館の一室で）